

斎藤忍随著

プラトン



boreas

eurus

斎藤忍随著

プラトン

岩波新書

836

zephyrus

notus

斎藤忍随

1917年北海道中頓別に生まれる

1944年東京大学文学部卒業

専攻—哲学

現在—東京大学名誉教授

成城大学文芸学部教授

著書—「ギリシア・ローマ古典文学案内」(共著)

「原典による哲学の歩み」(共編著)

「知者たちの言葉」(岩波新書)

プラトン

岩波新書(青版) 836

1972年10月20日 第1刷発行 ©

1982年2月20日 第13刷発行

定価 380 円

著 者 さい 斎 とう 藤 にん 忍 ずい 随

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店 会社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

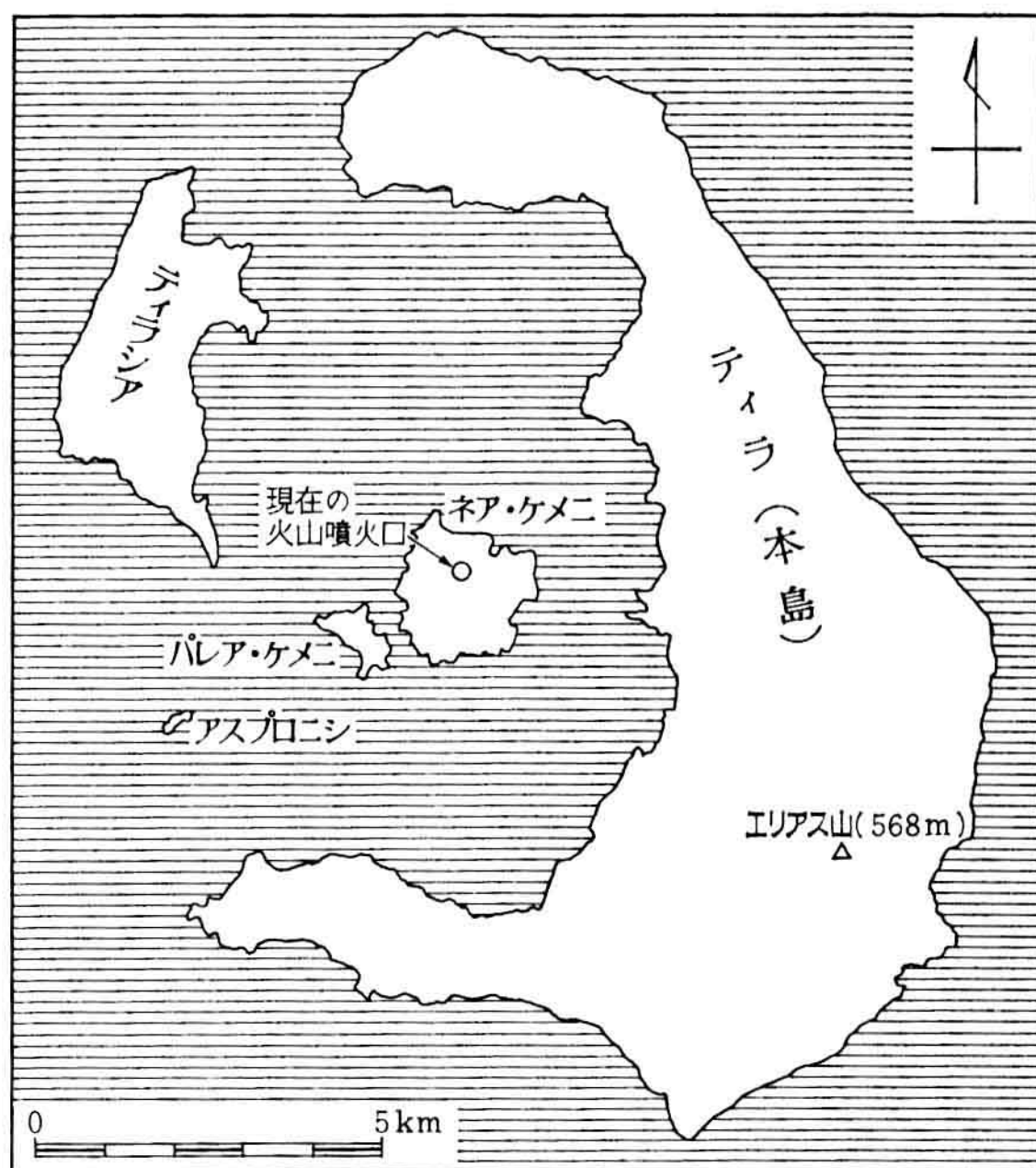
序	一
I 死	九
II 恋	三七
III 政治	一〇一
IV イデア	一三七
プラトンの著作解説	一七七
プラトン年譜	二〇〇
あとがき	二〇三

序

クレタ島の名を知らない読者がいるとは考えられないが、東地中海、つまりエーゲ海に浮ぶサントリン(Santorin ギリシア名 Santorini)という名の島を知っている日本の読者は、まだ非常に少いのではないだろうか。

昔から“Thera”とも呼ばれてきているこの島は、クレタ島の北、約一五〇キロメートルに位置しているが、実は五つの島から成る島嶼群で、現在もっとも大きなのが群の代表格でティラと呼ばれる島である。それは西側に大きく彎曲しながら、その五分の一ほどの大きさを持つティラシア(Therasia)に面していて、この二つの島が囲む内海のほぼ中心に位置するのがネア・ケメニ(Nea Kaimeni)、そのすぐ西に隣接するのがパレア・ケメニ(Palea Kaimeni)、そのまた西にあるのが、もっとも小さなアスプロニシ(Aspronisi)である。

サントリンと呼ばれるこの島、正確には島嶼群は、また時には「ストウロンギュレー」(Stron-gyle)と呼ばれたこともある。それは「円い島」を意味するが、実際、二つの島ティラとティラシアの外側の海岸線を繋げば自然に円ができあがるし、内海を全部埋立てれば、本当に一つ



サントリン島

の円い島ができあがるだろう。

サントリンには雨水を除けば、水というものが全くない。水は船でよそから運ばなければならぬ。農産物はトマトとぶどうだけである。そのぶどうからつくるサントリン酒は特に濃厚、強烈でギリシアでも評判のぶどう酒だけれども、自然の条件に恵まれている島ではない。

ただ自然は乏しさを補うだけの素晴らしい豊かな美の恵みをサントリンに与えた。

その周囲も内海あるいは大きな湾も地中海の青い海であり、白色のけずり取られた絶壁が海岸線をつくり、湾の中心にはネア・ケメニが、現在も活動しているエーゲ海でのただ一つの活火山として、糸鋸状の裾を見せ、煙を吐きながら浮上している。サントリンについて本を書いたあるドイツ人が『サントリン——夢と白日との間の島』という題名を選んだのも当然ではないだろうか(Lois Knidberger, *Santorin. Insel zwischen Traum und Tag*, Thames and Hudson, 1965)。海、火山、絶壁、青、白とそろえば、ただこれだけでも、人々の夢を誘わずにはおかないだろう。

だが、この美を造り出した自然の暴威はすさまじかった。火山を中心に置くサントリンの大きな湾は、大きなカルデラであって、島の歴史はまさに爆発と地震の歴史から切離すことができない。最近で大きなのは一九五六年の地震で、死者が五三人、二四〇〇の家屋が倒壊した。一九三八年の秋に始まった爆発現象は四一年の夏までも続いた。一七〇七年の爆発で始めて湾内の水面に姿を現わしたネア・ケメニの島は一八六六年の爆発で、その大いさを三倍にした。一六五〇年の爆発の音は五〇〇キロ離れたダーダネルス海峡でも聞かれた。七二六年の爆発で噴出した軽石は小アジアやマケドニアの海岸にまで達した。そして記録はさらに紀元前にまでさかのぼり、前一九七七年から一九六六年にかけての爆発でティラとティラシアとの間の、何も見えなかった湾内から四日間にあつた炎の噴出とともに一つの島が浮び上った。その島こそ現在



ミノア時代の壺

パレア・ケメニの名で残っている島なのである。

爆発の文字による記録はここでとだえているが、しかし、現代の考古学、地質学、地震学、海洋学などの総合的な知識は爆発の歴史を遙か青銅器時代の後期にまでさかのぼって、一つの想定を立てる。

およそ前一五〇〇年頃、長い休止状態にあったサントリン島の火山が活動期に入った。時には比較的に静かな、時には激しい爆発を繰返しながら、前一四七〇年頃、活動は頂点に達して大爆発が起き、円形の島の中心が完全にえぐり抜かれて、今の湾に相当する大きなカルデラができあがったのであって、現在見ることできる湾の中の島々は、すでに述べたような経過をたどって出現した。

美しい風景をつくりだした造化の強暴な歴史はざっとこのようなものらしいが、けれども青銅期後期に見せた大自然の強暴な力は、文明の無残な破壊をもたらしした。この爆発で噴出した軽石や火山灰の下にあたるサントリンの古い地層の中から、ミノア文明スタイルの壺も発掘されており、この島もミノア文明圏に入っていたことは明らかだが、ミノア文明の中心と言えば、言うまでもなくクレタ島である。そして、そのクレタ島はサントリンからわずか一五〇キロ南

に離れているにすぎないのである。

となると現代の学者たちが、大地震、大爆発がクレタ島におよぼした影響を考えない筈もない。すでに第二次大戦以前にも「ミノア文明期におけるクレタの火山爆発による破壊」という論文も出て、ミノア文明の没落をサントリンに結びつけようとする仮設が立てられていたが、戦後の研究はこの仮設に有利な材料をいくつも提供しつつある。

ミノア文明が青銅器時代後期にあたる前第一五世紀の中頃に急速に没落したとすれば、その原因はいったい何であったのか。クレタ島を盟主としたエーゲ海の島々から成るいわば一大海上帝国が、これに対抗する政治的軍事的勢力に圧倒されたと見るのも、一つの解釈だろうが、それだけでは充分に説明しきれない問題がいくつも残る。もし前第一五世紀のサントリンの地震が、地震学者の考えるように、一八八三年のクラカトア(Krakatoa)の大地震と同型であって、しかも規模がさらに大きかったとすればどうか。ジャワとスマトラとの間のスンダ海峡のこの島の爆発では大きな津波がともなって、死者は三万六〇〇〇を超え、三〇〇にのぼる町や村が荒廃した。この事実から推定すると、サントリンに面しているクレタ島の北の海岸線は巨大な波に襲われたと想像できるだろう。海岸からやや入り込んでいて丘によってへだてられた都市クノッソスは直接の決定的な打撃を免れたらしいが、海岸沿いのアムニソス、カトゥサンバ、ニルー・カニなど多くの重要な町々が壊滅したにちがいない。東海岸のイタノス、

パライオカストゥロ、カト・ザクロも、大きな損害を受けたにちがいない。南海岸にあって波はかぶらずにすんでも、震動による被害を免れた町はなかったと思われる。

多数の人命が失われたことも疑いえないだろうが、火山灰などの噴出物が畑地を絶望的に荒廃させたことも想像できる。爆発の時期を真夏と想定する学者は麦、オリーブ、ぶどうなどの全滅を信じている。生き残ってはみたものの、飢えと病気で死ぬ者も多数にのぼった筈である。さらに生きのびた者がいても、人口激減で、厚く灰をかぶった畑地をもとの畑地にもどすことはむづかしかったろう。

この推測、仮定が正しければミノア文明の中心クレタ島は、極端に言えば、天変地異のため、一瞬の間についえ去ったことになるのだが、この仮設の上に立って、ほかならぬプラトンの「アトゥランティス」の謎を解き明かそうとする大胆な試みも出て来た(J. V. Luce, *The Lind of Atlantis—New Light on an Old Legend*, Thames and Hudson, 1969)。

プラトンの『ティーマイオス』(Timaios) (24 D-25 D)と『クリティアース』(Kritiās)の二つの作品で述べられている海底深くに「失われた島」、あるいは「失われた大陸」アトゥランティスについては、これまでも二〇〇〇以上の論文や著作が発表されているらしいが、この新しい試みは、物語の中の事実の痕跡を大西洋の海底に探らずに、ミノア文明没落という歴史的事実に重ねようとする。

そういう試みである以上は、前第六世紀にソロン(Solon)がエジプトを訪れて、一人の神官から「アトゥランティス物語」を聞いたということも歴史的事実として受け取ることになるし、それがソロンの血統を引くプラトンの家系に受け継がれて来て、やがてプラトンがあらためて筆を取って表現したという想定を立てることもなる。アトゥランティスが「リビアやアジアを併せたよりも大きい」と表現されているのは、一つにはプラトンの頭脳の中に、東から地中海に攻め入ったペルシア大帝国のイメージが働いていたことから来た一種の誇張であるということになる。とにかくプラトンの語るように、ローマでもギリシアでもなく、アジアでもエジプトでもない国で、地中海の島々や沿岸のいくつかの地域まで抑え、高度の文明を持っていた一大勢力ということになれば、ミノアの海上勢力以外に考えようがなく、物語の中にクレタやミノアが一言も語られていないのは、ギリシア人の記憶の中からミノア文明が完全と言ってよいほど抹殺されていたためだということになる。大洪水のためにアトゥランティスが「一日一夜のうちに消失した」という件については、この新説の解釈を、もはや紹介する必要もないだろうが、それは、前第一五世紀のサントリンの大爆発がもたらしたクレタ島の壊滅である。

プラトンの記述ではアトゥランティスは、地中海の外の海に置かれているが、この説のように首尾よくそれを地中海の中に取り込むことができるか、どうか、難点がないわけではないが、

こういう新解釈が生まれて来るのも、プラトンの著作に依然として現代の人々の夢を刺戟する力があることの一つの証拠かもしれない。『ティーマイオス』や『クリティアース』の中にはたして歴史的事実が含まれているのだろうか。ホメーロスの場合のように、この二つの作品がヨーロッパの先史時代を照らす光の役をはたすことができるだろうか。こういう問題ならば胸のときめきを覚える読者も多いことだろう。

ロマンティックな夢を容易に見ることのできないのが現代人というものだろうが、そういう人たちを夢へとかりたてる力があるのはまず先史考古学であり、あるいは美しい風景であり、私の書き出しも、サントリンへの観光ガイドをかねた考古学的知識の披露のようになってしまった。だが私の仕事はプラトンへと読者を案内することであり、そのプラトンの著作で考古学に關係しているものと言え、むしろ例外であり、プラトンで見なければならぬのは、もちろん思想の風景である。一つ一つ主題のちがう数多いプラトンの対話篇のことを思っただけでも、この仕事は大変にむづかしい。しかし、とにかく案内を始めなければならぬ。さしあたって私は死の問題から始めよう。人は誰でも死ぬからである。

I 死

古い都に旅をして、寺院や美術館などをむやみにのぞいて歩くと、だれでも興奮のあまり美術史家のような気持になりはしないだろうか。けれども素人^{しろうと}はやはり素人であって、時がたつうちには定評のある傑作の印象もうすれて、案外なものだけが記憶に残るのではないだろうか。私もローマで数多くの彫刻を見てまわったが、今も忘れられないのは、ボルゲーゼ美術館所蔵のベルニーニ(Bernini 1598-1680)のアポローンである。追いつめられた少女ダプネーの長い髪先端や手指の先は早くも枝葉に変わり始め、弓なりにそらした全身の下半部にも、右脚を除けば薄い樹皮がまといかけている。恋い慕うアポローンの左脚は軽く宙に浮いて、左手は少女の後から廻って腹部に触れている。開き気味の口と、少女の髪を追う瞳には、軽い驚きの色が浮んでいる。その若々しい顔は、角度を変えると、青年というよりは、少年のあどけなさまでも見せてくれる。

アポローンがなぜダプネーの木(月桂樹)を愛するか、その由来を物語る神話を素材にした、この等身大の大きな像と並んで、同じベルニーニがやはりギリシア神話から取材した作品、少



豎琴をもつアポローン

女ペルセポネーを略奪するハイデース(冥府の神プルートーン)の像が陳列されているが、その節くれだった四肢、毛むくじゃらな顔、乙女の柔かな腰部に凹みをつくるほど強くくい入っている指、特に口もとに浮べたうす笑いは、大人のいやらしい好色さを遺憾なく示している、アポローンの清潔な若々しさを引き立てるかのように見える。

その上、ベルニーニのアポローンはルネッサンスも後期の作品のためか、純白の大理石は輝くばかりで、同じアポローン像でも、作品の価値の遙かに高いはずのバチカンの有名なベルベデーレのアポローンよりも、素人鑑賞家の私には、若さの美を強く訴えかけて来る。バチカン美術館のは歴史の風雪にたえたしるしとして、その大理石も汚れをとどめているのである。

それはとにかくとして、アポローンと言えば、人々は豎琴をもった音楽や芸術の守護神を想い出し、その神にふさわしく、永遠の美青年のイメージを結びつけがちであり、そして若さこそ人々がギリシア文化に対していただく一つの大きな魅力らしく、ギリシアに憧れた詩人ヘルダーリン(Hölderlin 1770-1843)も、『テューマイオス』の中の、あの老いたるエジプトの神官がソ

ローンに向けて発した言葉を、貴重な言葉として引用しているほどである。「君たちギリシア人は常に若い。老いたるギリシア人というものは存在しない」(Timaios 22 B 4)。

もしこの通りだとすると、美青年アポローンこそ、若々しいギリシアを代表するにふさわしい神だと言ってよいだろう。けれども、ギリシアの神々は複雑な性格をもっているし、なかでもアポローンは、その意味でもギリシアの典型的な神であって、プラトンが戯れに試みた『クラテュロス』対話篇の語源分析を見ただけでも、そのことの納得がゆくだろう。

ものの名前は、ものの本性、ものの実質を指し示しているはずで、もしそうでなければ、名前は本当の名前ではないと見る『クラテュロス』の極端な名実一致説を勇敢に進めて行くと、「アポローン」(Apollōn)という一つの名前で、少くとも、この神の四つの機能を説明しなければならぬ羽目になる。古典時代のギリシア人にとってのアポローンは、音楽の神であるとともに、予言の神でもあり、さらに医神でもあり、弓の神でもあるのだが、まず第一に、医者というものが、病気という悪、禍いから患者の身体や精神を「洗い浄める者」(apolouōn アポルーオン)あるいは「解放する者」(apolyōn アポリュオン)であると解釈すれば、アポローンという名が医術の神に適合することは明らかだろう。

第二の予言の神については、神の託宣は当然、真でなければならぬし、真理は「単純なもの」(haploun ハプルーン)だという論法から、その神の名アポローンの正当さを割り出そうとす

るし、第三の弓の神としての機能については、「常に射る者」(aei ballōn)という語を引き合いに出しての理屈になるが、第四の音楽の神についての説明は、すこし手がこんでいる。ピタゴラス派に「天の音楽」という考えがあるが、多数の天体は「一種の調和的結合」(harmonia)によって「共に動き」、シンフォニーをかなでる。だから音楽を司る神は、「共に動かす者」(homo-polōn ホモポローン)でなければなるまい。ところが、「共に、一緒に」を意味する「ホモ」(homo)という語が、ギリシア語では、時おり、「ア」(α)という一字の接頭辞で表現されることがあって、この場合も、元来は「ホモポローンであった神」が「アポローン」(Apollōn)と呼ばれることになったのである。

フォルクスエテュモロギー(語源俗解)ほど安上りな楽しみもない。落語長屋の住人たちの間で「女入り」とか「娘入り」とは言わないで、なぜ「嫁入り」と言うか、が問題になると、学のありげな顔をしたのが、無法な答えを出したりする。「男の方に目が二つ、そこへ女の方が目を二つ持って入ってくるから」、一軒の家に四つ目が入ったことになって、「よめいり」になる。学も知も、こういった人種とは比較にならないプラトンだが、『クラテュロス』は、意識的に、戯れに、インチキ語源解釈の手法を自由に操って、落語長屋のにぎやかさを思わせる。このアポローンの説明にしても(Kr. ylos 405 A-E)、「四つの神の機能を、一つの名まえから引き出そうとするのだが、apollouōn, apolyōn, haploun, aei ballōn, apollōn と並べてみさえすれば、



アポローン

ギリシア語の知識がなくてもインチキ振りはすぐ分る。それはただ音の大まかな類似を頼りにしているだけのことで、そう簡単に Apollōn という名まえが出て来るはずがなく、かえって逆に、この神の性格の複雑さを際立たせるだけではないだろうか。

しかし、さすがにプラトンである。あの手この手のエテュモロギーの遊戲に引きまわされているうちに、アポローンについて考える者は、あらためて、より真剣に考え込まないわけにはいかぬ仕掛けになっている。アポローンとは、いったい、いかなる神なのか。ベルニーニの美しい彫刻に表現されているような、ロマンティックな、永遠の美青年なのか。この神に主な四つの機能が列挙されるにしても、その中のどれが、この神のもっとも原始的な姿を示すものなのだろうか。

こんな風に考えてくると、どうしても、ギリシア神話の記録としてはもっとも古いホメーロスに手掛りを求めなければならないだろう。

ホメーロスの叙事詩『イーリアス』は、開巻第一行に「怒りを歌い給え、女神よ、ペーレウスの子なるアキレウスの」と歌われているように、全篇はギリシア